Research Institute for World History
Newsletter
No. 18 July 2012

CONTENTS
■「AAWH 第 2 回大会（ソウル）の報告」
南塚 信吾 —— 1 頁
■「アジア世界史学会ソウル大会報告
セッション「The World History Seen from Small Nations in the Nineteenth Century: The Tokai Sanshi's *Kanjin-no-Kiguu*」」
木村 英明 —— 3 頁
■ 動向 「1968 年」の世界史 —— 6 頁

世界史研究所「ニューズレター」第 17 号（2012 年 07 月）
発行： NPO-IF 世界史研究所 http://www.npo-if.jp/riwh/

AAWH 第 2 回大会（ソウル）の報告

南塚 信吾

アジア世界史学会（AAWH）第 2 回大会は、2012 年 4 月 27-29 日に、韓国ソウルの梨花女子大学において開催された。20 カ国から 250 人余りが参加して開催された。2009 年 5 月に大阪大学で第 1 回の大会が開かれて以来、学会は着実に成長しつつあることをうかがわせた。

1. はじめに

参加した国の数が 20 か国を数え、第 1 回より範囲が広くなったということは、世界史への関心が広まったということを意味していると考えてよいであろう。45 余りのセッションが開かれた。もちろん、同時間帯に 7、8 のセッションが設けられていたので、参加人数にばらつきがあったのは、やむを得ないところであった。そのなかで、テーマとしては、世界史教育とビッグ・ヒストリーとモダニティが特徴的だった。この三つのテーマに関するセッションがいくつも開かれていた。今回は、大テーマのセッションが設けられていなかったので、ややインパクトに欠けたが、もし設けられたとすれば、この三つであったろう。今回は、海域ネットワークのようなセッションはやや影をひそめていた。

以下では、世界史研究所が直接・間接に関係したセッションについて、簡単に報告することにしょう。

2. 世界史教育

世界史教育に関しては、

① Teaching World History in Asian Countries (Organizer, Sunjoo KANG)

② How to Design World History Learning/Teaching in the Era of Globalization, ICT, and Post Modernism (Organizer, Shiro MOMOKI)

③ Comparative Research of the World History Teaching in Asian Countries (Organizer, Shingo MINAMIZUKA)

が代表的であった。

世界史研究所が関係したのは③である。もとも

とこれは AAWH が 2010 年に開始したアジア諸国における世界史教育の実態調査のためのアンケート活動に由来する。世界史を考える AAWH も集まってみると、アジア各国での世界史教育がどのように行われ（行われてき）ているのか、お互いにほとんど知らないことを発見したのである。そこで共通の基礎的な情報を共有しようというので、このアンケート活動は始まり、2012 年 4 月の大会までに 7 カ国（韓国、中国、ヴェトナム、シンガポール、インドネシア、インド、日本）の回答を得た。現在ではこの 7 カ国という数字に世界史というものが置かれた現実が現れれていると考えるべきであろう。

さて、③のセッションでは、まず、南塚がアンケート調査の概要を序論的に紹介し、アジア諸国での違いがあるが、近年、外国史と自国史を統合した新たな世界史の動きが出ていることが注目されると指摘した。次いで、北海道札幌友朋高校の吉嶺茂樹さんが、北海道や沖縄といった自国史の周辺の観点から自国史の枠を乗り越えて、世界史を展望する歴史像が描けるのではないかという報告を行った。そして、第三に韓国の Sunjoo KANG さんが、韓国における最近二十年ほどの歴史カリキュラムの分析をした報告を行い、韓国での統合的世界史への動きとそれからの揺り戻しの動きと再度の統合への動きを見事に示してくれた。第四に、中国の南開大学の Weiwei ZHANG さんが、１９世紀以来の中国における世界史像の変化を踏まえて、現在の世界史教育の状況を報告してくれた。最後に、インドのハイデラバード大学の Satyanarayana ADAPA さんが、インドにおける国と州におけるカリキュラムの相違を指摘しつつ、現在の世界史教育の現状を報告してくれた。

いずれも力の入った報告で、改めてわれわれはアジアの隣国での世界史教育のことを何も知らないことを痛感させられた。報告後の討論では真っ先に、このセッションの報告はぜひ出版してほしいという要望が出たほどであった（これは大会後に、検討している）。

3.「併合」史

世界史研究所がお世話したもう一つのセッション は、「Comparative Study of "Annexation" in the Modern Word」であった。

1910 年の韓国併合を世界史という枠組みの中で議論するということは、AAWH の存在意義に関係する問題ではないかと考えられる。

セッションでは、まず福岡女子大学の馬場優さんが、オーストリア＝ハンガリー君主国によるボスニア＝ヘルツェゴヴィナ併合の外交史を分析して、日本の韓国併合の外交史との類似性を示唆する報告を行った。次いで、同志社大学の小川原宏幸さんが、日本にとって韓国への政策として「併合」が唯一の政策であったのかという問題を立て、それを世界史の脈絡のなかで検討すべきであるとする報告を行った。最後に韓国のソウル大学の Sang Chan LEE さんが、韓国の側からみた併合史と題する報告を行い、「植民地近代」論を念頭において、日本の政策を検討した。

韓国で行われる会議であるから、大勢の参加者が激しい議論を戦わせるのではないかと考えていたが、参加者は少数であった。そのこと自体を考えてみる必要があるようだ。このテーマは、おそらく日韓の歴史家の会議であれば、もっと関心をよんだのかもしれない。あるいは、学術的な会議ではあまり関心を呼ばないのかもしれない。ともかく、韓国併合を日韓の歴史の問題ではなく、世界史の問題として扱うことは、容易なことではないようだ。それはなぜなのか。考えられることは、世界史の問題としてしまうと、当事者（日本）の責任がぼやけてしまうということにあるということだろうか。ということは、歴史研究を責任追及を目的として行うということになりかねない。韓国併合は日本の帝国主義の責任であることは否定できないが、しかし、それは「勢力圏」や「併合」ということを当然とする帝国主義という時代を乗

り越えない限り、問題の解決にはならないのではないかと、思われる。

アジア世界史学会ソウル大会報告

セッション「The World History Seen from Small Nations in the Nineteenth Century: The Tokai Sanshi's *Kajin-no-Kiguu*」

木村 英明

世界史研究所では、各地域史の専門家を交え、過去に東海散士作『佳人之奇遇』の勉強会を数回に渡って行っている。その折のメンバーに中国と韓国の研究者を交え、去る 4 月 27 日から 29 日にかけて開催されたアジア世界史学会ソウル大会において、同書を題材に弱小な国・地域の民（small nations）から見た 19 世紀世界史の可能性を考えるセッションを組織させていただいた。

8 編 16 巻からなる同書は 1885 年（明治 18）に初編が刊行され、1897 年（明治 30）に完結している。一般的には、明治 10 年代から 20 年代にかけて流行した「政治小説」のジャンルに位置づけられてきた。柳田泉氏の労作『政治小説研究』には、自由党の板垣退助が訪欧中にヴィクトル・ユーゴーと会談した際に、自由民権思想を普及する方策として西洋の政治小説の翻訳を勧められたという逸話が紹介されている。政治小説という文学史上の括り方が登場するのは少し時代を下ってのことではあるにしろ、この逸話は当時において政治主張の表現形式と文学の表現形式の境界が曖昧であった事実を物語ると同時に、同ジャンルが自由民権運動の消長と切り離してはありえなかった事情を示している。柳田氏によれば、民権派による国会開設請願書の提出（1880）から国会開設（1890）までにおよそ 250 編にも及ぶ政治小説が書かれた。『佳人之奇遇』は、古代ギリシャ期（テーベの歴史）に材を取った矢野龍渓の『経国美談』（1883）と並び、それらを代表する作として、明治中期の知識人の耳目を集めた。一方で、初編刊行と同じ年には、novel に初めて「小説」という訳語をあて、近代文学の進むべき方向を示唆した坪内逍遥の『小説神髄』が世に出ている。そこでは、「小説の主脳は人情なり」とうたわれ、個々人の感情の表出と写実にそった描写こそが小説の王道であると規定されていた。これにより、政治や歴史の議論を主眼に置く政治小説が自由民権思想の枠から飛躍して新たな創作へと結びつく道は閉ざされたといっていい。現在では、漢文調の文体の難解さも相まってその全文に目を通す読者はめったにいないし、文学史のテクストもほとんどの場合、同書を近代文学黎明期のひとつのエピソード以上のものとして扱おうとはしない。

しかし、正統な近代文学史によらずに同書を再評価しようとする視点も少数ながら存在する。排除された政治小説の表現の可能性を指摘した前田愛は、次のように語っている。「『佳人之奇遇』があれほど広い読者を獲得したという理由なんですが、（略）一言でいえば「歴史への関心」です。『佳人之奇遇』をいまぼくらは一応小説として考えておりますけれども、むしろ小説の枠をはみ出た何かではなかったか。叙事詩といってもいいだろうし、あるいは歴史といったほうが正確かもしれませんが」（対談「政治小説と明治 20 年代の文学」、『闇なる明治を求めて』所収）。偶然の邂逅が繰り返される安直なプロット、貧弱な人物描写など小説としての未熟さばかりがたびたびあげつらわれ

てきたが、実際、歴史の提示という別の視点から見れば、近代文学を優越する側面が立ち現れてくるのではないだろうか。同時代の世界の動向とその背景である歴史を展望する構想の広がりは、日本の文学史上類例がないといって過言ではない作品なのだから。

ソウル大会のセッションでは、以上のような前提に基づき、まず世界史研究所の木村が、おもに米国が舞台となる小説前半の巻 9 までに伺われる散士の世界情勢認識、歴史意識について報告した。その叙述の中心には、衰退する国家（スペイン、トルコ、清、朝鮮）や強国の支配を受けるネイション（アイルランド、ポーランド、ハンガリー、インド、エジプト、マダガスカル、ハイチなど）が置かれており、ヨーロッパ列強中心の「世界史」とは際立った相違点を指摘することができる。自主自存の権利を侵害された弱小なネイションへの同情と連帯意識は、自由民権運動を起源とする政治小説の大きな要素といえるが、散士はさらに女性の主体的政治参加（アイルランド人紅蓮とスペイン人幽蘭、アイルランド人パーネル女史）をプロットの軸に据えている。『佳人之奇遇』前半の小説的魅力は佳人たちの冒険譚によって支えられているといってもいい。木村はこのような広い民権意識の根は、明六社に代表される明治初期の啓蒙思想に求められるのではないかと述べた。いっぽうで、小説後半に見られる朝鮮半島をめぐるナショナリズムについては、底辺民衆不在の啓蒙思想や自由民権運動の限界、政治家活動を通した散士自身の思想的変化を指摘した。

続いて、千葉大学の崎山直樹が、アイルランド史研究者の立場から作中のアイルランド問題に関する言及を取り上げた。崎山によれば、当時としては正確かつ該博な知識のおおよそは、作者が米国留学中にアイルランド系米国移民との交友から直接に得た可能性が高い。本国と米国におけるアイルランド自治運動の展開に触れつつ、作中のパーネル女史がおそらく本国の「アイルランド土地連盟」を資金援助するべく米国内で「アイルランド婦人土地連盟」（Irish Lady's Land League）を立ち上げたファニー・パーネル（アイルランド国民党党首チャールズ・スチュワート・パーネルの妹）であること、また経済学を専攻した作者の教員にアイルランド系で保護政策（American system）の提唱者ヘンリー・チャールズ・ケアリーやロバート・エリス・トンプソンがいたことを紹介した。また、自身が会津白虎隊の生き残りであり、「亡国ノ遺臣」である経験が、大英帝国に屈したアイルランドと共有される national story を作者に構想させたと述べ、アイルランド系移民が大英帝国に対抗するために米国に政治的理想を同一化しようとしたことと、会津の仇敵であった薩長主導の明治政府を西洋列強に立ち向かう国民国家として強固に支持した作者の姿勢に平行性を指摘した。

3 番目に報告予定だった上海外国語大学の盧守助は都合により参加できず、世界史研究所所長の南塚信吾が盧の報告要旨を代読した。盧は、戊戌変法の失敗後に日本に亡命した政治家であり、近代中国の優れた啓蒙思想家でもあった梁啓超の手になる『佳人之奇遇』の中国語訳（雑誌『清議報』に連載後、1901 年単行本出版）に即し、作中の前後半において顕著に見受けられる政治的主張の矛盾と、訳者自身のアジア情勢をめぐる主張の変化を関連づけて論じた。梁は、新しい小説こそが社会改良を導くための最良の手段であると考えていた（いわゆる「小説界革命」の宣言）。明治維新を範としていた彼が、亡命後時を置かずに日本を代表する政治小説の翻訳に取り組んだのは、その意味では自然な経緯であったろう。当時の翻訳には原作を改竄することをためらわない、「豪傑訳」と称されるものが数多くあり、梁の仕事もそれに属していた。盧によれば、主要登場人物である范卿のエピソード、小説後半の大きなテーマとなる朝鮮問題、「興亜」をめぐる言説などは大きく変更されている。明の遺臣を名乗り、「反清復明」

を唱える范卿の履歴はすべて削除された（後に梁は、自身の反満感情を改め、外国の侵略に対抗すべく国内諸民族の団結を説くようになる）。范卿の明朝復興論は具体策に乏しく、事実上日本を盟主とする興亜思想にすり替わっている。梁は、日本のアジア主義が中国のアジア主義と親和しないと考えていた。閔妃（朝鮮皇后）暗殺容疑で獄につながれた散士が描かれる小説終章の巻16では、後の朝鮮併合を正当化するアジア主義の議論が展開されているが、訳文からはそのすべてが削除された。梁はまた、この翻訳を契機として亡国史の研究に取り組んでいる。朝鮮、エジプト、ポーランドやベトナムなどに関する亡国研究は朝鮮語にも翻訳され、朝鮮の抗日運動にも理論的基盤を提供した。これを踏まえ、盧は「亡国の世界史」という叙述の可能性を提起した。

セッションを締めくくる報告を行った群山国立大学の表世晩は、『佳人之奇遇』巻10と巻16で集中的に描かれている朝鮮観を、朝鮮半島をめぐる当時の列強諸国の思惑という文脈から考察した。巻10では壬午軍乱（1882）と甲申政変（1884）を取り上げつつ、開化派の領袖であり日本に亡命した金玉均への強い同情と支持が描かれる。巻16では金玉均の暗殺（1894）、甲午農民戦争（1894）、閔妃殺害（1895）などに触れつつ、散士の東アジア情勢認識が開陳されている。表は、中国と日本、朝鮮の弱小国家が西洋列強に対して連帯することで保たれる勢力均衡こそが朝鮮独立のために不可欠であるという散士の議論を、福沢諭吉の脱亜論と対置する。また、朝鮮も決して王朝内の紛争に終始して無為無策であったわけではなく、たとえば閔妃は大院君に比べずっと現実的な国際関係を築く意志を持っていた。中国の助けを借りて日本を、さらにロシアの力で中国と日本を押さえ込むという、いわゆる敵を利用して敵を制する「以夷制夷」の外交手段を試みた。散士は巻10において甲申事変について日本の介入を強く批判し、朝鮮と日本の友好関係を損なっただけでなく、朝鮮半島を取り巻く諸勢力の間に相互不信を生んだと主張していた。さらに、「兵ハ凶器戦ハ危事ナリ」と戦争の悲惨を語ってもいる。ところがそのいっぽうで、「天下ノ乱ヲ平ラゲ」「万民ノ苦ヲ除カント」する戦争は不可欠であるとも考えていた。したがって、日清戦争は、日本の国力によって東アジアの同盟関係と平和を保証するための義戦と捉えられる。やがて、巻16に登場する閔妃殺害の首謀者である朝鮮公使三浦悟楼と同様に、朝鮮の併合を正当化するアジア主義へと傾いてしまう。表によれば、朝鮮の独立を唱えつつその対局へと行動した散士の二重性は、政治的自由よりも国権伸張が日本にとって急務であるという判断に由来していた。表は最後に、散士が金玉均にたいしては「我国民」と呼ぶほどに愛情を注ぎながら、同じ感情を大院君や閔妃を含む朝鮮の民衆すべてに抱けなかったことに、狭量なナショナリズムの限界を指摘した。

4名の報告に続いて、ハンガリー史の専門家である千葉大学の姉川雄大がコメンテーターとして発言し、小説の前半と後半を結節するように登場するハンガリー1848年革命の指導者コシュート・ラヨシュについて触れた。姉川によれば、小説ではハンガリー独立を掲げてハプスブルク軍と英雄的に戦うさまが描かれるが、多数の民族が居住する当時のハンガリー王国では批判する自身も同時に批判される立場になりうることにコシュートは無自覚であった。そのことと関連して、散士の民権と国権が矛盾して併存する主張について、個別的に切り離して論じてしまうと全体の事実から乖離する危険があるのではないかはないか、と指摘した。

セッションでは時間的制約もあり、十分に議論を尽くせたとは言えないが、19世紀末葉の一遍の政治小説をめぐって東アジアの研究者が世界史的視野から意見を交換する機会を持てたことは、文化の観点から広域の歴史を展望する可能性を探るうえで、確実な収穫であったと思われる。

動向

「1968 年」の世界史

過去数年のあいだに「1968 年」を世界史という土俵の上で考えようという著作が続いて世に出ている。1968 年から 50 年をすぎて、区切りとなるこの年を、さまざまな角度から歴史的に見直そうというのであろう。油井大三郎編『越境する 1960 年代――米国・日本・西欧の国際比較』（彩流社、2012 年）の「はじめに」によれば、その契機は多様である。しかし、1968 年の諸事件は世界各地に「同時性」をもって起きているので、いやおうなく "global sixties" として、世界的な規模での国際比較として考えざるをえないのだという。われわれの観点からすれば、このような国際比較研究はいやおうなく諸地域の関連をも取り入れて、「世界史」というものに展開されていかねばならないのではないかと思われる。同書の豊かな内容はたんなる比較研究にとどめておくには、もったいないのではないであろうか。

とはいえ、どのようにして「1968 年」を世界史として論ずるかは、いまだ方法が見えているわけではない。一つの例は、I. ウォーラーステインの論じ方であろう。周知のように、ウォーラーステインは、「1968 年革命」は一つのまとまった革命であったという。それは、最低 3 年は続いた革命であり、世界各地で展開され、「世界システム」を揺るがし、「世界システム」の文化＝イデオロギーを決定的に変化させた。そして、「1989 年」は「1968 年」の反乱の帰結でもあったという。そのような「1968 年」の起源は、「世界システム」に対するアメリカのヘゲモニー（それはソ連の追従でもあった）への抗議であった。1945 年からのアメリカのヘゲモニーが、西欧の経済的自立、ソ連での非スターリン化、中ソ対立、第三世界の台頭などによって揺らいできて、そこへ US ドルの危機や石油危機が起こり、システムが動揺し、その結果、アメリカ、フランス、チェコ、メキシコなどで革命が起きたのである。「反システム」運動という観点からみると、その「1968 年」は、「旧左翼」の反システム運動への抗議でもあった。19 世紀以来の反システム運動は、社会主義と民族主義であり、ともに「自由・平等・友愛」を掲げ、国家権力の取得を目指していた。そういう運動は 1945-68 年のあいだにかなりの成果をあげてしまった。そして、そういう中で育った若い世代の反システム運動が 1968 年におきたのだ。ソ連ブロックでおきたチェコの反乱（「プラハの春」）を見れば、スターリン主義によって代表される古い「左翼」にたいして、「人間の顔をした社会主義」を求めて若い世代が戦った。しかもそういう「若い左翼」にたいして「古い左翼」がアナーキズムだとして戦ったのだった。では、「1968 年」の結果はなにか。そのひとつは、これまでの「旧左翼」（社会主義と民族主義）が優先的な、唯一の正当な左翼ではなくなって、他のさまざまな反システム運動（女性、人種、障害者、環境などの「マイノリティ」運動）が同権を主張し、組織的にも思想的にもマルティプルとなったこと。二つには、さまざまな「反システム」運動が、「1968 年」以前までのように相互に対立的ではなく、互いに対話ができるようになったことである。ウォーラーステインはほぼ以上のように「1968 年」の運動を性格づけた。

そしてその上で、かれは、「1968 年」の「世界システム」への影響を下のように論じた。経済的には、1967-73 年が 1945-1990 年の世界システム期間の中での転換期である。1945 年からの戦後の成長期は 1967-73 年に終わる。そして 1970 年代、80 年代には、生産の伸びが低下

し、失業率が増大した。その結果 1975 年以降、「世界システム」におけるアメリカのヘゲモニーは後退し、多国籍企業が自由に活動できるようになった。1968 年からの不況に対抗するために、70 年代に石油価格引き上げがなされたが、石油値上げは、結局生産費を引き上げ、有効需要を減少させた。また、石油値上げは、世界中の剰余価値を吸い上げた。とくに第三世界からそれを吸い上げた。この吸い上げられた通貨は、①石油生産者、②多国籍石油企業、③中核の銀行での預金に回った。そして、「周辺」と「準周辺」（東欧を含む）の諸国へのローンとして「リサイクル」された。このリサイクル・マネーは、1970 年代に、「周辺」と「準周辺」の諸国の国際収支を均衡させることを可能にし、「周辺」と「準周辺」は、リサイクル・マネーによって「中核」からの輸入を増大した。だが、結局、1980 年代にはそれは「債務危機」に陥ってしまったのである。1980 年代には、「中核」では、不況に対抗するために、生産部門の変化が起きた。生産コストの低減のために、生産拠点が「中核」から「準周辺」と「周辺」へと移動させられた。また、生産活動から金融分野への投資のシフトが進んだ。そして、不況脱出のために、軍事支出が増大した。アメリカの軍事費が増大し、これについでソ連のそれも拡大した。これが「新冷戦」と呼ばれるものである。このような「1968 年」からのシステム変動が 1980 年代に特に顕著となって、「1989 年」が起きたのである（T. K. Hopkins, I. Wallerstein et al, *The Age of Transition*, London: Zed Books / Leichhardt: Pluto Press, 1996; I. Wallerstein, *After Liberalism*, New York: New Press, 1995）。

このような世界的規模での 1968 年論をどのように受け止めて、どのように発展させていくか、このような問題が突きつけられている。

以下では、「1968 年」を「世界史」の問題として論じていると思われる最近の著作を紹介することにしたい。

（南塚 信吾）

マーク・カランスキー『1968 ――世界が揺れた年』（前後編）（来住道子訳、越智道雄監修）、ソニー・マガジンズ、2006 年。

アメリカ合衆国のジャーナリストおよびノンフィクション作家である著者は、『鱈――世界を変えた魚の歴史』（1999 年）、『「塩」の世界史』（2005 年）［いずれも邦訳］など、これまでにも歴史を題材にした作品を上梓している。本書は、タイトルのとおり、「世界が揺れた」1968 年を主題として、各国で生じた体制に抗する運動や行動に焦点をあてながら、その 1 年の展開を詳細かつダイナミックに描く（原著　は、Kurlansky, Mark, *1968: The Year That Rocked the World*, New York: Random House, 2004）。公民権運動、ベトナム戦争への反対、学生や詩人の行動など、アメリカ国内の局面を中心としつつ、ポーランドの反体制運動やプラハの春、ドイツやパリの学生運動、またキューバやメキシコの状況などの一連の出来事が、綿密な取材および新聞・雑誌などの豊富な史資料をもとに記述される（残念ながら、本邦訳では原著の注と参考文献は割愛されている）。各国ごとに個々の行動や活動に集まる人々の争点は「ばらばら」でありながら、体制に対する反発心、権力への猛烈な嫌悪感、そしてその実行手段だけは共通していた（12-13 頁）。当時の世代の特徴とテレビの影響力についても指摘しながら、異なる行動が世界的に連動していく様相を、「その時代からずっと埋もれていた真実」（18 頁）とともに、歴史的に捉えようとするノンフィクションからの試みである。

（鈴木 健太）

Gerd-Rainer Horn, *The Spirit of '68 –Rebellion in Western Europe and North America, 1956-1976*, Oxford University Press, 2007.

著者のホーンは、1968 年を「トランスナショナルな危機と好機の時代」と呼ぶ。考察の対象となるのは、北米と西欧の大西洋圏の国々における「68 年」である。筆者は、書名でもある「68 年の精神」を、1950 年に始まって 68 年にピークに達し、76 年に終焉を迎える長期的で広範囲に及ぶ様々な社会運動のなかに描き出す。

1 章では、1956 年 9 月にイタリアのピエモンテ州アルバ市で催された「第 1 回フリーアーティスト世界会議」から 1965 年から 67 年の「アムステルダム・プロヴォ」に至る、反権威を前面化した文化の叛乱が紹介される。1 章では学生運動を取り上げるが、アメリカやフランスのよく知られた事例にはほとんど触れず、ベルギーとイタリアの運動に焦点を当てている。実は、欧州でもっとも早く学生の集団抗議行動が発生したのはベルギーであり、フランスのソルボンヌに先んじて学生による大学占拠が起きたのはイタリアであった。3 章では、68 年論のなかで見過ごされがちなロマンス語諸国の労働運動に着目している。1960 年代の新左翼研究は北欧とアングロサクソンの学生運動に集中しがちであるが、ホーンは南欧労働者が主体の「地中海新左翼」の意義を強調する。4 章でも前章に引き続き左翼運動の展開を叙述する。ただ、旧・新左翼から 68 年以降の極左の登場という一般的なクロノロジーとどまらず、56 年以降にすでにあった極左というユニークな視点を提示している。最後の 5 章では、新たな人間関係、コミュニティー、体制の創出を目指して試みられた参加型民主主義の具体的事例が取り上げられる。フリースクールやスペインで広まった町内会（neighbourhood association）の組織など、地味ながら影響力の無視できない運動について述べている。

1976 年のイタリアの労働運動の後退、ポルトガル革命の挫折により「68 年の精神」は終息するが、筆者はその遺産を肯定的に評価する点において多くの 68 年論と一線を画す。また、提示されている地中海諸国に関する情報も希少なものである。末尾には、「1848 年」と「1968 年」を歴史上の 2 つの世界革命として捉える I. ウォーラーステインらの発言（*Antisystemic Movements*, London, 1989）が引かれている。ホーンは 2 つのトランスナショナルな革命を誰も予期できなかったのであり、したがって、もう二度とそれが起きないという意見にたいしては、歴史を記憶するものならば幾分かの戸惑いを覚えざるをえないだろうと結んでいる。

（木村 英明）

アラン・バディウほか著、藤原書店編集部編『1968 年の世界史』藤原書店、2009 年。

本書は、「68 年」から 40 周年にあたった 2008 年 5 月、藤原書店の学芸総合誌・季刊『環』vol. 33 が企画した「世界史のなかの 68 年」と題する特集に加除を施して、ほぼ一年半後の 2009 年 10 月に単行本として刊行された。巻頭には、『環』の特集企画の文章が藤原書店編集部名で再録されている。ウォーラーステインの「一九六八年――世界システムにおける革命」（『ポスト・アメリカ』所収）を引用しながら、「『六八年』は『全地球的現象』であるかぎり、世界史の視点に立って初めてその意味は見えてくる」と述べ、日本の「六八年」と世界の

「六八年」との関わり、「北」の学生中心の運動が「南」の民衆にとって持っていた意味、そして「六八年」はいかなる意味において「転換期」であり「原点」であるのかという問いを提示し、「何よりも世界史の視点から、各分野の歴史的視点から、さらに当時を生きた人々の『証言』から、『六八年』を捉え直したい」と主張している。『環』の特集号刊行後、単なる「六八年」回顧ではなく「その現在に対する意味を問い直す」書籍が現れ始めたことを受けて、世界史を意識したこの特集号の視点の意義が強調されている。この部分に本書の意図が凝縮されていると言ってもよいだろう。

本書は二部構成から成り、第一部は「世界史のなかの 68 年」と題し、16 本の論文、インタビューが寄せられている。「パリの六八年」、「アメリカの六八年」、「メキシコの六八年」、「ソ連・東欧圏の六八年」、「中国の六八年」、「六八年革命と朝鮮半島」、「アフリカ・六八年の死角」という表題の論稿とともに、「女性から見た六八年」、「沖縄の六八年」、「日本の六八年」という視点からの論稿も収められ、各分野の歴史的視点から捉えようとする狙いがうかがえる内容となっている。板垣雄三とのインタビューをまとめた「六八年の世界史」（副題「六七年の中東から見る」）では、「『一九六八年』という問題の立て方自体に欧米中心主義的な世界観がこびりついている」とまで言い切り、さまざまな捉え方が可能であり、かつ必要であることを明示してくれている。

第二部は「わたしの 68 年」と題し、17 本の生きた人々の「証言」を回想の形で収録している。ここに収められた声がいずれも日本語話者のものであり、必ずしも世界の各地からの声とはなっていないからといって、本書の価値が失われるものではない。

（木村 真）

ノルベルト・フライ『1968 年――反乱のグローバリズム』（下村由一訳）、みすず書房、2012 年。

著者は 1955 年生まれのドイツの現代史研究者。2008 年に出版された原著の副題は、「若者の反乱　グローバルな抗議」。この翻訳書の帯には、「〈1968〉を世界史の中に位置付けた快作」とある。「イチキュウロクハチ」と記号化される現象は、それ以前の過去から現在につながる視野と、当時の西と東、北と南を超越する視点で、分析する対象でありうるし、本書もこのような関心に十分に応えてくれる。ただし、著者の目的は、社会全体を、日常生活のレヴェルから転換させることにつながった西ドイツの学生運動を、「1968 年前後」の世界規模の抗議文化との関連で考察することにある。そのために、5 月革命のパリの描写を導入として、ベトナム反戦、第三世界の解放、大学改革、政治的自由など、相互に関連する課題をめぐる知的ネットワークの展開を、アメリカから、ドイツ、あるいは日本、さらにはチェコスロヴァキアなどへと、比較を交えて叙述している。そして、ドイツの「1968 年」がもたらした持続的変化の源を、学生たちの反乱が、親の世代が語ろうとしないナチズムの過去を問うたこと、あるいは大学教員の経歴にも明らかな、その過ぎ去っていない過去と対決したことに見出している。第三帝国と西ドイツの、特にエリート層の連続性に関する研究業績で評価の高い著者ならではの、鮮やかな分析。その考察の過程では、第二次世界大戦の枢軸国の「1968 年前後」に関して、ナイーヴな平和主義と左翼テロリズムを共通項目として指摘する、まさに「世界史」的ともいえる議論も踏まえられている。日本では、1990 年代に入って、侵略戦争と植民地支配の被害者たちの抗議行動を契機に、

戦争責任と過去の克服をめぐる議論が活発化し始めた。このことと日本の「1968 年」との関係はここで論じる課題ではないし、この論争との関連でも少なからず示される、十分な考察もないまま戦後ドイツを手本に見立てるような安直な関心は、本書にふさわしくない。ネオリベラリズムの大学解体を経験し、沖縄や原発をめぐる抗議の実情を目撃しながら、「イチキュウロクハチ」をどう理解すればいいのか。その手掛かりをこそ、今の日本で「世界史」の研究や教育を行おうとする者は、著者の優れた分析叙述に求めるべきかもしれない。最後に、本書をここに紹介するにあたって、原著を参照しえていないことを断っておく。

（長場 真砂子）

本ニューズレターへのご寄稿は随時承っております。
文献紹介、研究情報など、世界史に関するご投稿をお考えの方は、当研究所までご連絡ください。

『世界史研究所 Newsletter』編集担当一同

発行日：2012 年 07 月 06 日
発行者：NPO-IF 世界史研究所

NPO-IF 世界史研究所

〒 150-0002　東京都渋谷区渋谷 2-17-3　渋谷アイビスビル 10F
tel: 03-3400-1216　fax: 03-3400-1217
e-mail: world_history@npo-if.jp　URL: http://www.history.l.chiba-u.jp/~riwh/

スタッフ

所　長	南塚 信吾（千葉大学・法政大学名誉教授）
顧　問	下村 由一（千葉大学名誉教授）
	百瀬 宏（津田塾大学名誉教授）
	Ivan T. Berend（UCLA 教授）
研究員	木村 英明（早稲田大学講師）
	木村 真（日本女子大学講師）
	鈴木 健太（東京大学大学院博士課程）
	長場 真砂子
	姉川 雄大（千葉大学特任助教）
	崎山 直樹（千葉大学特別研究員）
	鹿住 大助（島根大学講師）
特別研究員	近藤 正憲（学術博士）